2017年度　　NB

国　語(B方式)

注　意

1. 問題は全部で9ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その1)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし，マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する番号の ◯ を塗りつぶしなさい。◯で囲んだり╳をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が 1 のとき)

1	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⓪

4. 一度記入したマークを消す場合は，消しゴムでよく消すこと。╳をつけても消したことにならない。
5. 解答用紙をよごしたり，折り曲げたりしないこと。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

王朝文学を読みかえしてみると、全般的にみて、「人が走る」場面は少ない。特に、大人、とりわけ身分の高い人とか女性の「走る」姿を描写したケースは稀有である。

作品のなかには、「伊勢物語」「土佐日記」「和泉式部日記」「夜の寝覚」などのように、「人が走る」場面の全く現れないものもある。

王朝文学の「人が走る」場面から受ける感情には、大きく二つのケースが認められる。

「大和物語」第百四十九段は、「伊勢物語」(第二十三段)の筒井筒の段と同話である。男が別の所へ通って行くのを見ても、元の女は、いささかも嫉妬の感情を顕わにしないので、男は怪しんで、「前栽の中に隠れて、男や来るとみると」、女は頭を櫛梳り、溜息をつき、

風吹けばおきつしらなみたつた山よはにや君がひとり越ゆらむ

と詠じるさまを見て、男は女をいじらしく思う。

かくてなほ見をはりければ、この女うち泣きて臥して、金椀に水をいれて胸になむ据ゑたりける。「あやし、いかにするにかあらむ」とてなほみる。さればこの水、熱湯にたぎりぬれば、湯棄てつ。又水を入る。みるにいとかなしくて走りいでて、「いかなる心地し給へば、かくはしたまふぞ」といひてかき抱きてなむ寝にける。

ここで男が走り出た行動は、自分の浮気な性情が、女にどれほどの苦悶を与えていたか、それを表面に出さず優しく振舞っていた女の真実の心に覚醒したとき、激しく突きあげてきた女へのいとしい感情、その衝動に突き動かされたことによろう。現代の読者の立場から味わうと、「金椀に水をいれて」以下の女の嫉妬の情を表わす行動描写は、いささか誇張気味で、軽い滑稽感すら催さなくもないが、作者は、女と男とを真剣に対峙させ、男の愛の高揚を強調するために、彼を走り出させている。その意味で、この「走りいでて」の行動に対し、現代の読者は、男の激しい衝動を痛感し、深い思い入れをもって味読すべきであろう。

次は、道綱母が、夫兼家の冷たい態度に堪えきれず、石山参詣に飛び出す場面。

しのびてと思へば、[2]はらからといふばかりの人にもしらせず、心ひとつに思ひたちて、あけぬらんとおもふほどに、いではしりて、賀茂川のほどばかりなどにぞ、いかできあへつらん、おひて物したる人もあり。　（かげろふ日記・中）

この「いではしり」は、必ずしも、道綱母が走って家を飛び出した動作ではなかろう。先の「大和物語」のケースは、身体的にも「走る」行動を伴ったものと思うが、ここはむしろ、暗くみじめな雰囲気の充満する家の空間から脱出したい激しい思いを象徴的に表現したものだろう。「いではしりて」の「いで」が「家を」を出ることを意味し、「はしり」が小走りに逃げ出す行動を想像させ、心の苦悶の強烈さを刻印する。

以上あげたものは、多少のニュアンスの相違はあるものの、登場人物は、強烈な衝動に突き動かされて「走る」ケースである。「走る」行為は、人間の内的な精神の、[3]ある種の極限状況を象徴した行為として、深い思い入れをもって描かれているとみてよい。しかも、享受者は、そこに様々な感慨を催すことはあっても、「走る」人物に対して、滑稽さを感ずることはない。「人が走る」場面には、このようなケースのあることを認識する必要がある。

王朝文学には、「人が走る」場面に滑稽感を催すシーンもある。

「竹取物語」で、「人が走る」場面は、わずかに次の一箇所だけ。即ち、くらもちの皇子がかぐや姫の要求した「蓬莱の玉の枝」を持参したところで、

竹取の翁はしり入りていはく、「この皇子に申し給ひし蓬莱の玉の枝を、ひとつ所誤たずもておはしませり。なにをもちてとかく申すべき。旅の御姿ながら、わが御家へも寄り給はずしておはしたり。はやこの皇子にあひ仕うまつり給へ」と言ふに、物も言はで、頬杖をつきて、いみじうなげかしげに思ひたり。

と、竹取の翁が姫の所へ走り入っている。総じて「竹取物語」では、竹取の翁はやや戯画化されているが、この「走る」シーンも、翁自身は真剣そのものだが、その周 B 狼狽ぶりは老人の動作だけに、滑稽感を抱かせるし、作者も翁を走らせて戯画的に造型したのではなかろうか。

従って、彼らが「走るとき」とは、日常性を突き破るような、なにか異常なことが、内的、外的に生じていることを象徴する行為であった。その際、「走る」人の、内外からくる苦悩や悲痛さや感動などの極限状況を、登場人物と同次元で共鳴するように形象化されるケースと、逆に、その人物の、無風流ぶりや下品さを印象付け、滑稽感を催させたり、嘲笑すべき対象として形象化されるケースとに大きく分かれる。現代のように、「走る」行為が、日常茶飯事のこととなり、道路、校庭、駅など、どこにでも目に触れる時代とは相違し、王朝文学に現れた「人が走るとき」のシーン、それが身分の高い人であればあるほど、重い意味を付与されていることを、改めて認識すべきであろう。

次に、中世文学に現れる「人が走る」場面を対象にして、検討を加えてみたい。

4 中世文学には、王朝文学に比較し、総じて「人が走る」場面が多くなる。

王朝文学に散見された、登場人物が必死になって、悲愴感を漂わせながら走るシーンは、中世文学にも見出される。

同じ帝(後一条)、生れ給ふ時、上東門院、ことのほかに悩ませ給ひければ、御堂入道殿、さわがせ給ひて、御前より御障子を開けて、走り出でさせ給ひて、「こはいかがすべき。御誦経などかさねてすべき」と仰せられけるあひだ　(十訓抄・巻一)

彰子の産後の日だちの悪いとの情報を受け、道長が走り出ている場面である。

このような滑稽感を伴わない「走る」場面は、それほど多くはないが、苦悶から脱出せんとする「走る」行為は、中世文学では、ある固定した意味を含み込んでくるようになる。

例えば、平家都落ちの後、愛人資盛の身を案じ、窮地に立った右京大夫は、その心情を次のように吐露する。

つくづくとおもひつづけて、むねにもあまれば、ほとけにむかひたてまつりて、なきくらすほかの事なし。されど、げに命はかぎりあるのみにあらず、さまかふる事だにも心にまかせで、ひとりはしりいでなんとは、えせ［C］ままに、さてあらるるが、心うくて、

5 またためし類もしらぬうきことを見てもさてある身ぞうとましき　(建礼門院右京大夫集)

ここでの「さまかふる事」とは、髪を切って出家することであり、「はしりいでなん」とは、出奔して寺に入る行為であるため、

共に同じ目的意識を指示していることになる。

この「走り出る」行動は、出家に連動することが判明する。

この「走り出る」行動が、やがて出家、遁世そのものを意味することも珍しくない。例えば、如幻僧都の出家は、「いとあぢきなくよしなくて、やがてはしりいで給ひにけり」(閑居友・上巻第二話)で、指示されているなどは、その例である。

この「走り出づ」は、実際に、家から走り出るという身体的な動作を伴っていなくてもよい。そのような動作の描写というより、苦悶する空間から必死に脱出する、激しい衝動を象徴的に表現しており、その意味で「走る」[6]が観念性を付与されてきている。

王朝文学で、「人が走るとき」に滑稽感を誘発させる場面のあることは、すでに触れてきたが、それに類似した場面は、中世文学でもかなり見受けられる。ただ、作中人物として、庶民や武士などが登場することも多くなり、それとともに「走る」場面も珍しくなくなる。そのため、尋常な状況で「走る」程度では、滑稽感が誘発されがたくなってくる。いわば、「走る」行動が、そのまま嘲笑の対象としての比重が弱くなり、むしろ「走る」[7]行動に至るまでの状況設定に意を用いてくる。しかも、尾籠な話や下品な話、あるいは奇抜、珍奇な話柄のなかで、「走る」場面をはめ込む傾向が際立ってくる。

「宇治拾遺物語」(巻十一の九)の「空入水したる僧事」は、入水自殺を予告はしたものの、大衆の前で失敗した、一人の僧を見事な筆使いで戯画化した説話だが、水を飲んで溺れかけているのを助けられる場面が、次のように活写される。

> この引上げたる男にむかひて、手を摺りて、「広大な御恩蒙りさぶらひぬ。この御恩は極楽にて申しさぶらはん」と云ひて、陸へ走りのぼるを、そこらあつまりたる者ども、童部、川原の石をとりて、まきかくるやうにうつ。はだかなる法師の、川原くだりに走るを、つどひたる者ども、うけとりうけとり打ちければ、頭うちわられにけり。
>
> 褌ひとつの裸姿で、川原を走り逃げる僧の姿は、本人は必死であっても、客観的に見れば、まさに滑稽そのもの、戯画化の極致である。その感情を一段と増幅させているのは、そこに至るまでの、この僧の不審な言動と、それに伴なう空入水の道程にある。

中世文学からあげてみたが、「人が走るとき」に生ずる滑稽感は、王朝文学が微温的なものであったのに対し、中世文学の場面は、相当に下卑た場面を背景にして走っており、強烈で鮮明な印象を与える。

貴族の創作した、貴族生活を内容とした王朝文学には、いわゆる大人の「走る」場面は極めて稀少だった。「人が走るとき」は、なにか異常な衝撃を受けたときで、その内情が、真剣、深刻、苦悩、あるいは感動などの極限状況を背景とした行為の現れであった。

その際、走る人物を取りまく、内的、外的な状況判断により、あるいは作者の［　D　］化の方向によって、その人物の心情が、そのまま享受者側に、同質の次元で受けとめられるケースと、逆に滑稽で笑いの対象となるケースが認められた。

一方、中世文学になると、「人が走る」場面は、王朝文学に比べてかなり多くなってくる。「走る」人の姿から受ける感情は、王朝文学と同様であるが、苦悩や深刻さの極限状況を背景とした「走る」行為は、「走り出づ」が、そのまま世を捨てて出家する意味を生じてくる。また、滑稽的な場面も、日常性を破るような、相当にどぎつく、下卑た場面設定のなかで描写される傾向が強くなってくる。

中世文学のこのような特色は、中世における人々の生活形態の変化によって、「走る」行動や「走る」という言葉から受けるニュアンスに変化があったこと、また中世文学の作者層が、単に貴族階級だけでなく、僧侶（遁世者）、武家、町人、芸能者まで拡大し、そこに登場する人物も、貴族のほか、僧侶、武士、庶民など広範囲にわたっていることと関連をもつであろう。

日本の王朝貴族は、生活様式からみても「走る」動作を抑制されるようになっている。さらに、そのような身分や階層の枠組みをはずして巨視的にみると、日本民族自体も、「走る」行動をそれほど必要としない民族だったといえる。日本民族は農業や林業を生活の基盤とした、いわゆる定住民族である。農耕生活においては、牧畜や狩猟で生活を支える民族に比べ、敏捷（びんしょう）に早く「走る」行動はそれほど必要ではない。鳥や獣と違って、田畑は逃げ出したりしないし、樹木も一定の場を離れない。

日本のオリジナルな履物に着目しても、木沓（まくつ）はさておき、庶民の履物も、草履や下駄など、いわゆる跳躍や競争するのに不向きにできている。地上からあまり足を離さない、また、その必要があまりないというところに、日本民族の生活様式の特色があった。そこに、足を地上から高く離す動作は、下品で嘲笑すべきもの、あるいや異常な行動であるとの共通認識も形成されてくる。典型的な足の動きは、能における「すり足」である。国技である柔道や相撲でも「すり足」を基本とし、軽々しく飛び跳ねる

動きは敗北とかかわってくる。「すり足」――これが日本人の民族としての歩く典型的な姿であったといってもよく、その典型が貴族階級の行動にあった。

履物だけではない、衣服にしても和服は「走る」行為に適さない。住居にしても、椅子(いす)でなく、じっくりと腰を据えるのが和室の生活空間である。日本文化は、いそがしく走らない生活を指向してきた伝統の上に成就されてきたのである。

しかし、現代の日本人は、身体的な行動においても、精神的な方面においても、[8]世界で最も走っている民族となっているのではなかろうか。スピード、速力が、人や物の価値を判定する時代になっている。別段、ジョギングなどの盛行を言っているのではない。新幹線は日本列島を猛烈なスピードで突っ走り、自動車、オートバイに乗って人は走る。サラリーマンも商売人も、社会のスピード化の渦のなかで、気持まで齷齪(あくせく)している。

このような生活態度や精神状況に、一種の危機と不安を痛感し、スローライフを提唱する有識者もいるが、民衆たちはそれに耳を傾けて実践することは少ない。身体的にも精神的にも「走る」行為が、ごく当り前になった時代、走らなければ社会から振り落とされる時代、これが現代日本の社会状況である。

ここに想到すると、同じ「人が走る」場面であっても、王朝文学や中世文学に現れたものには、現代的な感覚で軽く読みすごせないような、重い意味が付与されていることを念頭にして読解する必要があるだろう。（稲田利徳『ひとが走るとき』による）

問一　二重傍線部A「前栽」の読みをひらがなで書きなさい。**解答用紙(その2)を使用。**

問二　傍線部1「金椀(かなまり)に水をいれて胸になむ据ゑたりける」とあるが、どうして「女」はこのような行為をしたと考えられるか。最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は [1] 。

① 男の不審な行動を冷静に見極めようとしたため。
② 男に対する愛情をより強いものにしようとしたため。
③ 男に対する思いを滑稽な行動で緩和しようとしたため。
④ 男が自分のところに戻って来るようにするまじないのため。
⑤ 男への嫉妬の感情を抑えて表面に出さないようにしたため。

問三　傍線部2「はらからといふばかりの人にもしらせず」を現代語訳しなさい。**解答用紙(その2)を使用。**

問四　傍線部3「ある種の極限状況を象徴した行為」とあるが、本文に引用された「かげろふ日記」の場合、「極限状況」とはどのようなものであったと考えられるか。最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は [2] 。

① 暗い家の空間を明るくするためには、激しい行動を取らねばならないと思い詰めた状況。
② 家から出ていく夫を賀茂川のほとりまで追いかけて行くことを制御できない状況。
③ 夫の冷たい態度によって暗くみじめな雰囲気の充満する家にいることに堪えられない状況。
④ 自分に冷たい夫の愛情を取り戻すために、なんとしても石山参詣をしなければならないと思い詰めた状況。
⑤ 是が非でも、心の苦悶を抑えきれない感情を周辺の人に気づかれないようにしなければならないという状況。

問五　空欄 [B] に最適な漢字を一字入れなさい。**解答用紙(その2)を使用。**

問六　傍線部4「中世文学には、王朝文学に比較し、総じて「人が走る」場面が多くなる」とあるが、どうしてか。最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 3 。

① 中世文学には戦いの場面が多く、必然的に走り回ることが多くなるため。
② 王朝文学は優雅な生活のみを描くのに対して、中世文学では滑稽を描くことを主としているため。
③ 王朝時代には貴族のような身分の高い人がいたが、中世にはそのような人がいなくなったため。
④ 中世は日常を逸脱した異常なことが起こることが多く、それを表現することが必要であったため。
⑤ 貴族生活を内容とした王朝文学と違って、作者や作中人物が庶民を含む広範囲な人々になってきたため。

問七　空欄 C に助動詞「ず」を適切に活用させて記しなさい。**解答用紙(その2)を使用。**

問八　傍線部5「さてある身ぞうとましき」の意味として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 4 。

① そんな身でいられるということは珍しいことだ。
② それはそれとして、愛人のいる人は悲しいものであることだ。
③ そのような状態の身でいるというのはいたたまれないことだ。
④ そういったところで生きている身というのは望ましいものであることだ。
⑤ そうであっても或る状況にある人たちをうらやましく思うことだ。

問九　傍線部6「「走る」が観念性を付与されてきている」とあるが、ここで言われている「付与されてき」た「観念性」とは具体的にどのようなことか。文中の単語一語で答えよ。**解答用紙(その2)を使用。**

問十　傍線部7「「走る」行動に至るまでの状況設定に意を用いてくる」とあるが、それはどうしてか。最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 5 。

① 「走る」行動をとる人物が多くなり、その行動だけでは滑稽感が感じ取れなくなったため。
② 「走る」行動を滑稽感と結びつけるには武士という人々の登場が必須であったため。
③ 「走る」行動に唐突感を感じさせないためには、それなりの事由を提示することが求められたため。
④ 「走る」行動に滑稽感を持たせるためには、尾籠な話がどうしても必要であったため。
⑤ 「走る」行動は日常生活のいかなる時にも出現するので、状況設定がないと話が抽象的になるため。

問十一　空欄 D に最適な単語を次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 6 。

① 印象　② 深刻　③ 苦悩　④ 共通　⑤ 形象

問十二　傍線部8「世界で最も走っている民族となっている」とあるが、このような状況に対してこの文章の著者はどのように感じているか。著者の考え方にはないと思われるものを次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 7 。

① 日本民族の伝統的な行動とは相反している。
② 乗り物のスピード化は人の気持ちをせかせかさせる。
③ スローライフに耳をかさない人々がいることに疑念を抱いている。
④ 走らなければならなくなった時代は賞讃されるべきことである。
⑤ 王朝文学に顕れた「人が走る」場面に重い意味を読みとるべきである。

問十三　引用された古典の中に「十訓抄」があるが、この作品の成立時期にもっとも近い作品を次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 8 。

① 弁内侍日記　② 古今和歌集　③ 枕草子　④ 雨月物語　⑤ 太平記